

第 1 章

私の英語教育 12 の体験から

私は、理論よりも体験や逸話で語ることを好きである。理論はあまり記憶に残らないが、体験や逸話は読者の心の中に残り、様々な局面で教訓を引き出せるからである。定年退職にあたり、人間形成的英語教育をテーマに、これまで私が出会った幾つかのシンボリックな体験や逸話を取り上げて、そこから何を学んだかを物語ってみたい。

体験 1 予期せず指導困難高校へ転勤(1979年)

私は大学時代に自分が何のために生きているのかわからず、虚無感の中をさ迷って4年間を過ごした。4年生になっても就きたい職業がわからず、時間かせぎに1年留年したがそれでもわからず、アルバイト生活に疲れて一休みするような動機で、教員になったという不屈き者であった。

大学を卒業し高校英語教員になって9年が過ぎようとした3月のことだった。普通科のG高校に赴任して3年目で、2年生を担当し、学級経営も教科指導も非常にうまくいっており、翌年は3年に持ちあがろうと意欲を燃やしていた矢先に、愛知県東部地域で有名な指導困難高校への転勤を命ぜられた。まさに青天の霹靂の辞令であった。

高校教員が、3年以内で転勤することはあまり無い。私はその学校の管理的指導方針に反対し、職員会議で盛んに異論を唱えていたので、おそらくそれへの反発がこの転勤を招いたのだろう。担任していた生徒たちと泣く泣く別れて、私は転勤先のT校へと向かった。

転勤先のT校の荒れ様は、聞きしに勝るものであった。詳しく述べることは本題でないので避けるが、

- 素行の悪さ(盗み、器物破損、無断借用)
- 怠惰(清掃さぼり、無断の欠席・遅刻・早退等)
- 生徒同士の関係の悪さ(喧嘩・いじめ・不信)

- 学校と教師への不信と反発
- 授業モラルの欠如(私語・居眠り・暴言・カンニング・授業妨害)

といったありさまで、ジャングル状態であった。

授業とはいえば、始業のチャイムが鳴っても教室に入らず、前時の板書は消してなく、定められた席を無視して好きな者同士で集まり大声で私語を交わし、教科書を出さずにマンガを読み、机に伏して眠り、小テストでは集団カンニングをし、注意すれば「なんで俺だけ注意するんだよ。あいつだってそいつだってやってるじゃねえか」と撥ねつけられる。

担任としても英語教師としても、自分が機能していないことは明白だった。生徒には「テメエウルサー！」とものしられ、同僚には「三浦さん何やってんだよ」と責められ、自尊心ボロボロの暗澹たる不安の日々。「自分はそのうち、内臓をやられるか、精神をやられるか、どちらかだろう」とさえ思っていた。

体験 2 英語資格取得に没入

前任校で授業と学級経営に燃えていた矢先に、まるでしっぺ返しのように、わずか3年で転勤を命じられた悔しさは、私の闘争心に火を点けた。私は、やり場のない憤りを、英語関係の資格を取りまくることに振り向けた。それまで、検定など馬鹿にして、4級すら受けていなかった自分が、いきなり1級合格を目指して猛勉強を開始した。毎日夕食後、8時から午前0時くらいまで4時間、英検受験対策本で必死に勉強した。3か月ほど後に一次試験を受け、まだ合否もわからぬその翌日から二次試験の勉強をした。当時の二次試験は、スピーチ試験で、教壇に並ぶ試験官3名を前に20人ほどの受験者がコの字型に着席し、各自の机の上には問題が入った封筒が置かれていた。受験者は自分の番が来るとその封筒を開け、書かれている2つのスピーチテーマのうちどちらかを選び、1分間の猶予の後、英語で3分間スピーチを行い、その直後に試験官からの関連質問に答える形式であった。

対策本には、過去の出題テーマが150ほど載っていたが、それを見て私は巨大な絶壁の下にいるような絶望的な気持がした。Bilingual Education / The Harm of Smoking / Industrial Robots and Employment / Traffic and Air Pollution など、硬い話題が並んでいる。しかし、1日に3テーマの原稿を書けば、

1か月で90テーマ準備できる。2か月あれば180テーマになる。いくら英検の出題者でも、そう毎回ちがうテーマを考えることはできないだろうから、類似した問題が出るにちがいないと考えた。そう考えたら、不可能が可能に見えてきた。それから毎晩、対策本に載っている過去の出題テーマ3つについて、1.5分の草稿を書き始めた。規定時間3分のうちの半分までスラスラ話せれば、残りの時間はなんとか続けられるにちがいない。

一次試験準備から二次試験準備まで通算して5か月、当時の私にとってこの勉強が無上の救いとなった。昼間の人生は、相手(生徒や上司や同僚など)がいる世界であり、相手がこちらの言うことを聞いてくれないのでカラ回りし自尊心がズタズタになる世界であった。それに反して、試験勉強の世界は、自分さえ頑張れば確実に前に進むことのできる世界である。おまけに、資格試験は情実によらず、実力で勝ち取れる世界である。私は昼間の屈辱感・無力感・怒りの黒いマグマを、夜の受験勉強にすべて注ぎ込み、馬車馬のようにものすごい進度で前進を続けた。

準備の甲斐あって、二次試験では余裕をもって堂々とスピーチをすることができ、英検1級に合格し、さらに成績優秀者として表彰された。こうして私は秘かなりベンジを果たすことができた。それでも飽き足らずに、同じ年に通訳技能検定にチャレンジして合格し、翌年にTOEFLペーパーベストで670点を取り、1987年に通産省ガイド試験に合格、その他科学技術翻訳士試験に試補合格、日本語教師養成通信講座修了などを達成した。数年間にわたって、英語を聞きまくり、読みまくり、書きまくり、話しまくった。私を転勤させた前任校校長への怒り、そんなことを許している教育行政への怒りのエネルギーすべてを勉強に注ぎ込んで、難関と言われる資格を取りまくったのだ。もし自分が、怒りをそうした建設的方向に向けずに、別の方に向けていたら、自暴自棄な行動すら取っていたかもしれない。目標を達成した時は、恨んでいた人たちにさえ感謝したい気持ちになった。「学ぶことは自分を支え、自分を変える」ということを初めて体験した。そしてこの時の英語猛特訓が、後になって自作教材開発や海外大学院講座受講の素地となって生きてくるのだった。

体験3 授業を全面的に方針転換(1983年)

T高校の生徒アンケートによれば、最も嫌いな科目は英語であった。入学

時の英語の成績は、高いクラスで約 3.5、低いクラスでは 2.0 くらいである。生徒の進路希望は、大学進学が 40 人中約 5 人、他は就職か専門学校進学であった。

赴任後 3 年間、無理やりにも授業を聞かせよう、ひたすら英語を叩き込もうとして、強圧的な指導を行った。授業の最後の 10 分間を小テストにあて、その日の授業を聞いていないと点が取れないようにした。定期試験の問題を難しくし、勉強しないと赤点を取るようにした。赤点者には補習を行い、反復練習的なドリルで合格点を取ることを要求した。教科書を持参しているか点検し、ノートを提出させて平常点に加味した。どれもこれも、生徒の力を伸ばすためというよりも、自分の授業を成立させるためであった。

工業高校の生徒にとって、英語授業が学業に占める割合は非常に小さい。しかも英語は苦手な嫌いな科目である。そんな生徒を相手にして、私は自分が受けてきた旧来通りの授業を行い、赤点で追いまくるのだから、生徒の顔は苦痛でゆがんでいた。この時の私の授業は、学ぶ喜びをもたらすどころか、奴隷の強制労働であった。

そんなふうにして 3 年目の卒業生を見送ったあと、「もうこの授業スタイルを続けることはできない」と踏ん切りをつけた。自分は言葉の教師であり、言葉は人と人をつなぐものであるはずなのに、授業を重ねるたびに、生徒と距離が離れてゆく。その孤独に耐えがなくなったのだ。こうして、私は自分が受けてきた英語授業のスタイルと決別せざるをえなくなった。さりとて、代わりにどういう授業方式を採ったらよいかの見当は全くなかった。

「本当に生徒に語りたいことを英語で語ろう」「生徒が何を考え、何を求めているかを英語で聞こう」とその時思った。日頃から、生徒に語りかけ、聞きたい事柄が心に貯まっていた。それを英語の教材とし、授業をやろうとしたのである。もちろんこれは、英語の文法や語法・語彙を教える上では、偏りが生じるという問題がある。しかし、どうせ検定教科書で満遍なく教えたとしても、大半の生徒は聞いていないのだから、結果的には同じだと考えて、3 年生の選択英語(週 2 回)の授業で翌 4 月に実行に移した。

最初に行った、‘Bullying’での真新しい感激は今も忘れない。最初に、イソップ物語の *The Boys and the Frogs* を平易に retold した物語で、内容理解・音読・文法解説を行い、物語最後のカエルの長老の叫び、“What is play to you is death to us all.”の意味(「あなたがたにとって遊びであることが、私た

ちにとって死を意味するのだ」)を強調した。次いで、前年に東京で起こった集団いじめによる自殺事件の被害者、ふみと君が父親に書き残した遺書の内容を平易にまとめた150語程度の英文を作り、先のイソップ物語と同様の手順で教えた。それから下記のような選択肢を示して、もし同様の集団いじめを受けた場合、自分ならどうするかについて、生徒の考えを問うた:

- (1) I will fight back even if I am lynched.
- (2) I will join the bully's group.
- (3) I will put up with the bullying.
- (4) I will get better grades. Then they will stop bullying me.
- (5) I will ask the police for help.
- (6) I will ask my parents for help.
- (7) I will change school.
- (8) I will kill myself.

この選択肢の本当の目的は、自殺以外に取りうる方法があることを生徒に示すことであった。

それから、下記の選択肢を与えて、「次のようないじめ行為を目撃したことがありますか?」と問うた:

1. They tell someone to die.
2. They always neglect someone.
3. They say that someone has a bad smell.
4. They call someone 'the god of death'.
5. They always laugh at someone's looks.
6. They break someone's clothes.
7. They hide someone's textbooks.
8. They beat someone for fun.

この選択肢の本当の目的は、こうした行為が、ある個人に集中的に加えられると集団いじめとなることをわからせることであった。どちらも、選択肢から選ぶことによって英語が苦手な生徒でも自己を表現できるように工夫した。

選択肢を教師が順次読み上げて、生徒が小さく挙手して答える方式で、生

徒たちの考えを聞いた。具体的にどの答が多かったかは記憶していないが、生徒はそれまでとは打って変わった真剣さで授業に参加していた。寝ている者など一人もいない。「目が据わってる」と表現しようか、まさに彼らの人間性が授業に脈打っていた。

実はこのクラスにも、素行の悪い生徒や横暴な生徒が何人かいた。始める前、私は彼らの中の何人かがこの教材に反応して「なんだテメー、何が言いたいんだ。はっきり言ったらどうだ!」というふうに食ってかかってくるかもしれないと思っていた。それを覚悟で、薄水を踏む思いで、しかし断固としてこのテーマを取り上げた。自分の人間性の根幹から、真剣に全力で生徒に語りかけた最初の授業であった。そして生徒の表情から、この授業が深く受け入れられたことを私は感じた。

この成功に発奮して、この方式で「ガールフレンド」「好きな歌手」「なりたい職業」「好きなマンガ」「好きなスポーツ」「好きな観光地」「友情」「義憤を感じた事件」などのテーマで授業を作った。パソコンもプリンターも無い時代で、毎夜3時間以上をかけて教材をタイプライターと手書きで書いた。生徒が喜んで参加する姿を想像しながら作るの、楽しくてたまらなかった。授業へ行くのも楽しみだった。

この授業では、成功も失敗も全部自分の責任であった。それが、今までの授業との決定的な違いである。自分の信念に基づいて、自分の作戦で準備し、実施し、その成果が歴然とわかるのだ。それまでの私は、授業がうまくゆかないのを、「学習指導要領が悪い」「検定教科書が悪い」「校長が悪い」「生徒が悪い」と外的要因のせいにし、「自分が悪い」と思ったことはなかった。あのままゆけば、私は他人を批判するだけで自分からは何も創造できない愚痴り屋で終わっていただろう。ところがあの日から私は、愚痴り屋ではなく、創造者になった。たった一人で、現状を越えてゆくパイオニアになった。

この授業のもう1つの収穫は、私が生徒から学ぶ姿勢ができたことである。「“Who is your favorite singer?”に答えよ」という課題を出したら、生徒はBilly Joel, Barry Manilow, Whitney Houston, Men at Work など、聞いたこともない名前を書いてきた。そこで私はレコードレンタル屋に行ってそうした歌手のレコードを借りて聞いてみた。大部分は騒々しい曲で、とても授業で使えるものではなかったが、中に1~2曲はゆったりとした、心に響く曲があった。それを「今月の歌」に選んで1か月かけて歌えるようにした。この

ようにして私の授業のレパートリーが増えただけではなく、自身の心のなぐさめになるような名曲と出会うことができた。「生徒はどんな歌手が好きか」「どんなコミックを読んでいるか」「夏休みは何をしただろうか」、それを知らうとして授業に行くと、生徒は彼らの世代の情報を私に教えてくれた。普通に生活していたら、聞くことのできないような、別の文化のみずみずしい情報である。それをかじってみるにより、私の硬直化した感性が柔軟になり、おかげで私はバーンアウト症候群を免れてきた。そして、このように彼らに耳を傾けようとしてゆくと、彼らも私に対して心を開いて打ち解けてくるのであった。「今日は生徒(学生)からどんなことが学べるかな」、そんな楽しい期待をして、授業に行くようになった。

また‘My Favorite Comics’では、『タッチ』というマンガを教えられ、本屋で買って私も好きになった。‘My Summer Plan’では、一人の生徒が夏休みに豊橋から九州まで往復の単独自転車旅行を計画していることを知った。「義憤を感じた事件」では、私の教材に触発されて、就職試験で東京に行った時、老婦人が駅構内で転倒して誰も助け起こさないのを見て、思い切って介抱した生徒がいた。このようにして、授業を行うごとに生徒が理解できるようになり、私が聞く耳を持っていると知った生徒たちは心を開いてくるのだった。特に難しい理屈があるわけではない、「生徒たちは何を知っているだろうか?」「このことをどう考えるだろうか?」「何が好きだろうか?」と知ろうする姿勢を持っただけである。

このようにして授業改革1年目を終え、作成した自主教材約30本のうち、成功したものの三分の二を残して、あとは廃棄して新しく教材を書き直した。3年目には、人数分印刷した全教材を印刷所に持ち込んで冊子に製本してもらい、『アクティブ英語コミュニケーション』という自主教材とし、それを使って授業を行った。

授業改革前、大嫌だった授業は、今や楽しくわくわくする発見の喜びに変わった。生徒にとって奴隷的苦役だった授業は、英語による交流の場へと変わった。教えるごとに生徒と私の距離が縮まって、私は日々精神的に若くなっていった。

体験4 三省堂英語教育研究論文コンテストへの応募(1985年)

授業改革を始めて3年目の5月、ふと目にした三省堂の教師用冊子に、英

語教育論文コンテストの案内が載っていた。400字詰原稿用紙100枚、応募期限は7月26日消印有効、賞金は一席が10万円とある。賞金にそそられた面もあったが、英語教育界で辺境扱いされている指導困難校で奮闘する先生たちに、自分の授業改革の実践を知ってほしいと思い、応募することにした。

1学期の終業式までを忙しく過ごし、7月20日終業式が終わると同時に執筆を開始した。自分が熟知している事柄だが、文章に直すとなるとなかなか手間がかかる。提出までに7日しかない。朝から深夜まで、机に向かってひたすら書き続けた。完成させる自信はあった。

しかし、執筆開始から3日目の22日に、妻が過労で寝込んでしまった。6歳・3歳・0歳の子供をかかえて体力の限界ギリギリで家事育児をこなし、夏休みに入ったら夫が加勢してくれるだろうと期待していたのに、夫は一日中部屋にこもったまま出てこない。そんな負担と不満が重なってのことらしかった。それからは、子育てと家事が全部降りかかってきた。0歳をおんぶし、6歳と3歳を机の横で遊ばせ、0歳のおしめを取り換え、ミルクを飲ませ、3度の食事を作り・片づけ、洗濯や掃除をしながら執筆を続けた。それから更に3日たち、25日になっても妻は起きられない。私も疲労と心労が重なり、嫌になって投げ出したくなった。「ええい、もうヤメだ！ こんな状況で書けるか！」「べつに論文なんか応募しなくていいじゃないか」そう心が傾いた時、頭の中でこんな声がした：「女房のせいにして投げ出せば、楽だよな」。「なにを！」その声を聞いて私は思い直した。今、ここで投げ出したら、自分は心の中で失敗の原因を他人に帰するだろう。そうした逃げ方が、将来癖になるかもしれない。だから、絶対にここでやめることはできない。そう覚悟を決めると、心が明るくなった。笑顔でこまねずみのように家事・育児・看病をこなしながら、しゃにむに原稿を書き続けた。ワープロの普及していない時代で、鉛筆で原稿を書いていたため、右手の人差し指が圧迫で痛みだし、代わりに中指で書き、それも痛くなり、指に包帯を巻いて書き続けた。右手首が腱鞘炎になり、左手で右手を動かして書き続けた。こうして締切日の26日の午後4時に脱稿し、郵便局に駆けつけて消印に間に合わせた。

「どんな逆境にあっても、自分はいくじけずに書き上げる」、この論文執筆を通して私は、それまでの自分よりも1つ上の次元へと抜け出すことができた。それだけで満足で、その後論文がどうなったかについては、すっかり忘れていた。

10月のある日、三省堂から論文が奨励賞(つまり佳作)に入ったとの連絡があった。東京の如水会館で開かれた表彰式に出席してみて、その物々しさと華々しさに驚いた。小川芳男先生、若林俊輔先生をはじめとして、日本の英語教育界の第一人者の先生方8名が審査員として出席しておられ、講評をいただいた。祝賀会の席で、当時静岡大学教育学部教授であられた佐々木昭先生が、「三浦君、あなたの実践には温かいハートがある。これからもがんばって実践を高めてほしい」と声をかけ、「広く学会で多くの人に学ぶことが大切だよ」と、中部地区英語教育学会への入会を勧めてくださった。愛知県の片田舎の指導困難校で、たった一人で授業改善を試みていた私に、広い世界への道が開かれた。

今回の三省堂英語教育論文コンテストが2年後に行われることを知り、私は今度こそ一席を取ろうと心に決めた。それまでの実践を更に改良し、理論的考察も付け加えて、1987年の第4回コンテストに応募し、念願の一席に選ばれた。これら2回の応募論文は、三省堂出版の『これからの英語教育』に収録されている。入賞を機に、研究社の英語教育月刊誌『現代英語教育』や『中部地区英語教育学会紀要』などに執筆する機会が増えていった。そして1292年に、それまで改良を重ねてきた自主教材を『英語コミュニケーション授業の実際』というタイトルで第一学習社から出版した。

体験5 英語教育の人間形成的役割を論じた文献との出会い

私は高校時代から高校教員時代までずっと、英語を功利的道具としか考えない風潮に反発を抱いてきていた。高校時代、教師は事あるごとに「ここは入試に出るからよく覚えておけ」を強調した。中学校時代の友人は、高校のホームルームの時間まで英語の受験指導に使ってしまう担任のクラスにいて、自殺した。教員になってからは、英語は「主要受験科目」だとしてハッパをかけられ、模擬試験で他校との競争に駆り立てられた。私は英語は大好きだったが、その英語とは、広い世界へのあこがれの扉、偏狭さからの解放の言葉であった。もし英語が単に受験や出世の道具にすぎないのなら、そんな道具を教えることに一生を費やすことなどまっぴら御免だと思っていた。だから心の底で、いつか英語教師を辞めようとすら思っていた。

中部地区英語学会に加え、JALT(全国語学教育学会)やBritish Council 英語教育セミナー、研究社英語セミナー、小田原LIOJの英語教員セミナー、上

智大学の Sofia Seminar などに参加するにつれて、英語教育の理論を学ぶことが増えていった。中でも、英語教育がどのように人間形成に役立つのかを論じた文献に出会えたことは、大きな進歩だった。特に感銘を受けた文献は下記のものである。

- (1) 田中春男『To Live Beyond My Power』（三友社）
- (2) 土屋伊佐夫『明日の英語教育』（明治図書）
- (3) カール・ロジャーズ(H. D. Brown, *Principles of Language Learning and Teaching* より)
- (4) アブラハム・マズロー(H. D. Brown, *Principles of Language Learning and Teaching* より)

上記の(1)は、ふとしたはずみで殺人を犯して少年刑務所に入った不良少年が、独房で英語を勉強することを救いの糸として、立派な通訳者にまで成長してゆく軌跡を描いた自叙伝である。(2)は、英語の熟達までに至らずに学習を修了する大多数の生徒にとっての、英語学習の意味を問うたもの、(3)は人間を、もって生まれた可能性をフルに開花しようとして生きる存在ととらえ、教育の目標はそうした開花を支援することだと説いたもの、(4)はすべての人間が「生理的欲求」「安全の欲求」「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己表現の欲求」という基本的欲求を持ち、これらの欲求を充足しようとするのが人間の行動原理であると説いている(これらについては、私の著書『ヒューマンな英語授業がしたい!』に詳しく紹介している)。こうして私は、英語教育に大きな意味を見出した。

ここで「人間形成的英語教育」とはどのような教育を意味するのかを定義しておきたい。「人間形成的英語教育」とは、英語力の養成を第一目標としながら、その授業内容として、人間形成に資する要素を重視する教育である。扱う人間形成的要素としては、次のような領域が提案されている：

- (a) 異文化理解：異文化を学び、自文化に気づき、異文化への寛容と適応性を養う。
- (b) 平和・人権・民主主義：(例：新英語教育研究会)「この会(新英語教育研究会)は、平和と独立をもとめ、民主主義をかちとり、真実をつらぬく科学的な外国語教育の確立を目指して活動をおこなう」と規約に掲げ

ている。

- (c) Global Education: 世界平和、地球環境問題、人権保護、南北格差是正等への関心を養い、地球市民としての意思疎通の道具として英語を教える。1974年のUNESCO 勧告に呼応したアプローチ。
- (d) Humanistic Language Teaching: 言語教育を通じての自己理解、自己受容、他者共感性、情意的側面の涵養を重視したアプローチ。Carl Rogers, Charles Curran, Gertrude Moscovitz らに代表される。
- (e) 授業プロセスを通じてのコミュニケーション教育: 生徒が教室で参加する英語コミュニケーション活動そのものの中に、母語を含めたコミュニケーション教育(特に社会性育成)の目標を具現化しようとするアプローチ。あくまでも第一義的目標は、英語コミュニケーション能力の育成に置く。授業アクティビティーを通じて、自己受容・自己向上・共感的理解・他者理解・人間関係作り・initiative taking・risk taking 等、肯定的なコミュニケーション実現に役立つ資質の涵養を図る。このアプローチは、メッセージではなくプロセスに依拠しているため、より中立性が保ちやすい。詳しくは『ヒューマンな英語授業がしたい!』を参照されたい。

なお、上記(a)~(e)の領域は互いに排他的なものではなく、1つの実践が複数の領域を含むのが通例である。

体験6 学び、トライし、実践に没頭した日々(1986年)

学会や研究会に参加して授業改革の方向性が見えてくるにつれて、もっと本格的に英語教育学を勉強したいという願望が湧いてきた。しかし、当時私は既に40歳で、妻と子供3人の家族をかかえており、現職を離れて国内外に留学することは不可能であった。県にはごく少数の教員海外派遣留学制度はあったが、公募されておらず、私のように県の教育行政を批判している者に白羽の矢が立つことはありえなかった。

唯一考えられる道は、アメリカのフルブライト奨学金かハワイのイースト・ウエスト・センター奨学金、イギリスのブリティッシュ・カウンシル奨学金を獲得してから、県教委に無給での留学を願い出ることであった。そこで私は1986年と1988年、2回にわたってイースト・ウエスト・センター奨学金に応募した。どちらも、一次選考はパスしたものの、二次選考で不採用であっ

〈中 略〉

本 PDF では pp. 12-23 を省略しています

首都エルサレムで、名だたる使徒たちに加わって伝道活動する意欲に燃えていた。ところが道中、神の使いがピリポに現れて、「ガザへ行け」と命じたのだ。当時のガザは原野の真ん中の辺鄙な寒村にすぎなかった。「首都ではなく、なんでそんな辺境に？」ピリポは内心不服だっただろうが、それでも言いつけに従ってガザへ向かった。すると途中で、ある旅行団と一緒にになった。請われるままにピリポは彼らに、イエスの十字架と復活のことを話して聞かせた。実はその一行は、エチオピア女王に仕える高官の一行だったのだ。高官はピリポの言葉に深く感動し、その場でピリポから洗礼を受けた。さらに聞いた話を帰国してエチオピア女王に報告し、その結果女王はキリスト教に改宗し、原始キリスト教団に莫大な資金援助を提供した。それまで細々と活動していた原始キリスト教団は、それによって財政基盤を確立し、宣教を拡大することができた。」

「人間にとって意に染まぬ展開の中に、実は素晴らしい神の計画が秘められているものです」、牧師さんはそう言って話をしめくくった。「ガザへ行け」はそれ以来、私を支える杖となっていた。

T高校は私にとってまさにガザであったと思う。当初は、神はなぜ私をこの学校に遣わしたのか、と不服であったが、実はそこに既存の授業スタイルを抜け出して新しい授業を構築する神の計画があったのだ。もしあの時T校から転勤という道を選んでいたら、今の私は存在しなかっただろう。そう考えて振り返ってみると、生徒が喜んで授業を受ける姿を喜び、私の実験的授業を応援してくださった同僚の先生方と、型破りな授業に不平を言わず喜んでつきあってくれた生徒達が、今ではとてもありがたく思える。

体験 12 枯死しそうな魂に届く授業を

私は高校3年生の時、友人Bを自殺で失った。遺体を前にして私は何の相談にも乗ってやれなかった自分を責めた。しかし、悲しいという感情や涙は、何日たっても浮かんでこなかった。受験勉強に疲れて窓の外の暗闇を見ながら、「彼にとって勉強とは何だったのか」と問い続けた。小学校から積み重ねてきた国・算・社・理・英などのおびただしい知識、そのどれにも、死のうとする彼を引き留める力はなかったのか。彼の姿は、明日の自分自身に思えた。

『だから英語は教育なんだ』が出版された時、私はBの墓を訪れ、花束を

供えてこう語りかけた。「君のためのリベンジのつもりだよ」

昔も今も、思春期の生徒たちは心の飢え・渇きをかかえて生きている。自分が愛せない、自分の存在意義がわからない、他人とコミュニケーションが取れない、もめ事を言葉で解決できない、好きな異性にアプローチするのが怖い、人生なんて嫌なことばかりだ、こんな自分が生きてゆける自信が無い等々、心の闇をかかえている。学校の授業はそれに無関係でよいのか？ 英語の授業は、心の飢えなど放っておいて、受験力や実用力を鍛えればいいのか？ 生きる術ばかり教えているうちに、生きる主体が枯死しそうになっていることに気がつかないのか？ 気がついていても、「それは私の仕事ではない」と言うのか？

現代の日本の凶悪な殺人事件の多くも、対人交渉が苦手で、他人と良好な関係が築けず、問題に対処する力が未熟な人が、自暴自棄になって無関係な他人を巻き添えにして起こしている。2008年の秋葉原無差別殺傷事件の犯人がその典型である。実行まではゆかずとも、彼と同様の衝動を抱える若者は大勢いる。彼らのためにも、人間性を豊かにし社会性を高める授業を広めてゆかねばならない。

本書の体験5(a)～(e)で紹介したように、英語という教科は人間性と関わらせることが容易な教科である。むしろそうした方が意欲が湧き、楽しく、記憶に定着しやすい教科である。私たちが人間形成的英語教育を提唱しているのは、この理由からである。

いつも私の心の中には、英語が苦手で苦しむ生徒の姿がある。受験対策一辺倒で、学ぶ喜びを感じられない生徒がいる。授業がうまくゆかなくて苦しむ教師の姿がある。点を取らせる指導でへとへとで、教師生活に意味を見いだせない教師がいる。そして、おびただしい知識や技能を与えられながら、生きることに枯渇している人々がいる。生きようとしてもがく魂に水を届けるような授業を、これからも研究し、広めてゆきたい。

大した信念もなく教師になった自分だが、今振り返ると、教師になって本当によかったと思う。生徒たちが私を育ててくれたのである。人間形成的英語教育は、生徒の人生を豊かにするだけでなく、教師の人生をも豊かにするのである。

まとめ

以上、私の人間形成的英語教育探求の旅を物語ってきた。教育基本法第1章第1条に「教育は人格の完成を目指し」とあるように、教育の第一目標は児童・生徒が持って生まれた可能性(potential)を全人的(whole person)にフルに開花させることを支援することである。まかり間違っても、国や産業や学校が自己の都合のいいように児童・生徒の偏った能力を訓育教化することを目的としてはならない。人間形成的英語教育は、まさに本来の教育の王道を行くものなのだ。

ことに日本では、約150年にわたって、人間性と関係づけることによって英語学習を動機づけながら人間性を養う教育実践が、草の根的に全国の教師によって取り組まれ・蓄積されてきている。これは、英語圏のESL環境での研究を凌ぐものである。この肥沃な伝統を受け継ぎ発展させると共に、世界に向けて人間形成的英語教育を発信してゆきたいと思う。英語教師の皆さんが、この精神を受け継いで、各自の持ち場で全人的教育の種を播き育ててゆかれることを期待する。